

新潮文庫

紋章

橫光利一著



新潮社

新潮文庫

紋章

横光利一著

新潮社版

紋章

定價 140 圓

新潮文庫草2A

昭和二十二年八月十五日發行
昭和四十四年四月三十日二十五刷

著者 橫光利一

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社

郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京二六〇局一一一(大代)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・石福印刷株式會社 製本・憲專堂製本所

© Chiyo Yokomitsu 1947 Printed in Japan

紋

章

一

夜の大川端に沿つて走る自動車の窓に雨が流れつづけてやまない。私は助手臺に乗つてゐる雁金とさきから話してゐたのもやめ、中潮なかしほに押し上げられる瀾瀾とした眞黒な水面を眺めながら、今夜の雁金の計畫はどこまで成功するものであらうかと、早や疑ひが起つてきてならなかつた。ときどき、突き進んでくるヘッドライトの明滅する中で、降り下る雨足の燦然と輝き連る光錠が、ぐらりと急角度に一轉する度に、私は夢想から飛び退いて眼を見張るのである。雁金はと見ると、彼は恐らく私が彼に幾度も今夜の杉生との對談について教へたやうに、段取りを幾回となく繰り返してゐるのに相違あるまい。ときどき彼は胸のチヨツキが膨らぎすぎてはゐないかと胸に手をやつたり、首筋を搔いてみたりはしてゐるが、多分、正直者の早口な彼は、杉生と逢へば、いきなり話の前後を顛倒させて、あけすけにぼろを饒舌つてしまふであらう。もうそれは私には眼に見えてゐることであつた。

目的の家に近づくにしたがつて雁金は不動の姿勢をとり始めた。今夜雁金が失敗すれば、彼の好機は後一二年の間は先づ來ないと見なければならぬ。彼の横にゐる運轉手の戸川は雁金の目的を早や知つてゐると見えて、ときどき雁金の方に傾きかかつてはにやにやと笑つてゐた。

これは雁金がチョッキの下腹部に、彼の精製中のバナナの皮を保温するため、今も巻きつづけてゐるのにちがひない證據である。私は雁金が私の横の廣いクッションへ坐らなかつた原因が、この車が自身の監理を頼まれてゐる自動車店の車であるからだといふのではなく、腹部に巻きつけたバナナの皮の醗酵する臭氣を私に近かよせないためだと、やうやく今ごろになつて分つて來た。

紋

章

しかし、いよいよ芝の杉生家の玄關へ自動車が着いたとき、あれほど私が心配してゐたにもかかはらず全く意外な事件が持ち上つてしまつた。それは丁度私が停つてゐる自動車の中に坐つて、出ていつた雁金の再び戻つて來るのを待たうとしてゐるときである。私の乗つてゐる自動車とは別に一臺の自動車が玄關のヒマラヤ杉の横に停つてゐた。始めは私も雁金も幾分固唾を飲んでゐたときとて、その自動車には氣附かずにゐたが、雁金が雨の中を小走りに玄關まで行きつくと、突然、光りを背にした一人の若い美しい婦人が玄關から送られて出て來て、よく延びた大跨な足で裾除けを蹴りながら停つてゐた自動車に乗り込んだ。すると、雁金はその婦人が彼の横を顔も見ずに行き過ぎてしまつたところ、不意に何事かに氣がついたと見えて、くるとこちらを向き返ると、また車の方へ馳け戻つて來た。私は忘れ物があつたのだと思つてぼんやりと彼を眺めてゐたが、彼は私の車に戻らずにその婦人の後を追つかけていつた。しかし、雁金がその婦人に追ひついた時には、もう婦人が自動車に乗つてしまつてばたりとドアを閉め

たときだつたので、間もなく大きくカーブを描いて自動車は鳴り出すと、雁金は引き摺られるやうに踏臺に足をかけたまま、窓を激しく叩きつづけて開けろ開けろと叫んでゐた。自動車は雁金を振り落すやうに濡れたヒマラヤ杉の中へぐさりと刺し込んで、急に強く走り出した。しかし、雁金は窓にしがみついたままたちまち自動車と一緒に見えなくなつた。しばらくの間啞然としてゐた私は、すぐ私の自動車に命じて彼の後から追はしていつた。けれども、私の出足は前の自動車とはもうよほど遅れて走つてゐた。私たちが門を出たときには、もう彼の乗つてゐる自動車は大通りを左へ曲らうとしてゐるときであつたから、私たちがそこまで出かけたときは、他の方から疾走して来る眼まぐるしく濡れた幾臺ものぐるぐるした自動車に邪魔されて、どれがどれだか明瞭に區別することが出来なかつた。そのうへに、雲霧のやうに降りかかつてゐる秋雨の煙りが、ぼつとライトに輝き渡る度毎に、前後は朦朧として一層見えなくなつて来るのである。それでも私の運轉手は雁金の配下であるだけに、スピードを増して見る見るうちに數臺を追ひ抜いた。私は運轉手に雁金のゐる自動車の番號を覚えてゐるかと思つてみた。運轉手もうろたへてゐたときと見えて、細いところは見えなかつたと云つて海底のやうな暗い大道を無茶苦茶に走りつづけた。しかし、うつかりするともう雁金は抛り落されてしまつてゐて、私たちより後になつて今ごろはまた杉生家の玄關の方へ戻つてゐるころかもしれないと、だんだん私は懸念に堪へなくなつて來た。

「君、どれだつたか分つてゐるかね。」

「分りませんね。それに車がかう辻つちや、これや駄目ですぜ。危い危い。」と運轉手の戸山が答へた。

「それぢや、もう後へ引き返して貰はうか。」と私は云つた。

それにしても、私は雁金のこの突然な舉動には發狂したのではなからうかと思ふ以外に、さつぱり理由が分らなかつた。私は戸山がもしかしたなら知つてゐるのではあるまいかと思つたので、それとなく彼に訊ねてみたが、彼も私同様に皆目何のことだか分らないと答へた。しかし、雁金の追つかけた若い婦人は人違ひでなければ、杉生家とは何らかのかかはりはあるにちがひないことだけは確實であつた。運轉手の戸山の話では、杉生家へ來たのは今までに度々あつたから、あの婦人は杉生家の令嬢でないことだけは明瞭だと教へた。私は雁金の前に話した杉生家のことを思ひ出した。杉生家は雁金の今ある自動車店とは親戚關係になつてゐて、自動車店主の押坂は雁金と故郷を同じくしてゐるところから、落魄してゐる雁金を救ふ目的で自動車とは全く縁遠い彼に、當座の間店の管理を頼んだのである。

私はついでに少し前へ戻つて雁金がこの夜杉生家へ私を同道して來た目的を話すことにしよう。實はこれは彼が私を連れて來たのではなく、私が彼を連れて來たのであるが、それまでにはなかなかややこしい複雑な話をしなければならぬ。

雁金の私に話したところによると、彼の家は東京近郊の縣下にあつては、その郡第一の資産家であり、代代勤王をもつて知られてゐる名門であつたとのことであるが、雁金の父のところから資産は次第に傾きかかり、雁金の青年期には、彼が押坂家の司る商事會社の支配人の名目に置かれて他家の仕事に従事しなければならなくなつた。しかし、その土地では今なほ資産よりも名門を尊ぶ風習があつたから、彼が郷里にゐる間は生活に不自由することは何もなかつた。ただ雁金の野望は一重に家産の挽回にかかつてゐた。それより以前に雁金は一時産業組合の購買係りをしてゐたことがあつたが、彼が押坂商事會社の支配人をやめた原因といふのも、つまりはそのとき貯へた彼の物價に對する研究心のいたすところといつても良いであらう。彼の不幸と狂氣に近い研究心とは、そのときから雁金を引き摺り廻してやめなかつたのである。

歐洲大戰が終ると間もなくわが國の物價は未曾有の奔騰を來たしたことは、今は誰でも知つてゐることであらうと思ふ。このころには、それらの物價の奔騰するさまは夢のやうなものであつたから、世の人人は一攫千金の夢につかれ、誰も彼もきよときよとして何事をしてよいのか全く仕事に手のつかない時代であつたが、購買係りをしてゐた青年雁金の滿滿たる野望も、ひとしくこのとき爪を現はしてかかるべき襞にひつかからざるを得なかつた。ある日、彼が新聞を見てゐると、九升入の樽一本の醤油の値段が、十二圓に改定されたと發表されたことがあつた。そのころは最上の醤油が一樽三圓であつたときとて、この急激な四倍の躍進の仕方は、

物價とその原料との間に大きく開かれた隙間に、突如として雁金をほり落してしまつたのである。雁金はしばらくの間は、どちらを向いて良いのか見當さへつかなかつた。ただ彼はよぢ登つてひと儲けすべき好機の到來してゐることだけは感ずることが出来たが、時勢の特殊性を見極めるためには、あまりに彼は若すぎて無我夢中でありすぎた。そこで、彼は飛び上つた醬油の價格ばかりに爪を矢鱈と鋭く研ぎすましたままうろついてゐるときに、これも全く偶然なことは、丁度そのころを見はからつてのためであらう、ある新聞の廣告面に特許芋取醬油會社の、プレミアム附きの株式募集を見つけたのである。雁金の野望は直ちに再び、その好機に飛びついて足をぶらぶらさせ始めた。

その廣告面には、從來の醬油は小麥と大豆で造るがゆゑ、値段をはつてもひき合はないが、本社の特許は薩摩芋を原料としてゐるため、生産費はいままでの三分の一もかからない。たとへば一般製品の半額にて販賣するとしたつて、なほかつ五割の利益がある。しかもこの方法は本社獨占の專賣特許法によるものである。――

容易にぬけ上ることの出来ない不幸といふものを造るためには、自然は多くの場合、そのものの上に幾重かの計るべからざる偶然を選びよせて來るものであるが、雁金もまたこの例にもれず、このとき三度目の偶然が彼に向つて襲つて來た。それは、彼の近所に一代で百萬の産をなした成功者の一人に、芋から燒酎を取つたものあつたことだつた。なほそのうちに、薩摩

芋は雁金の郷里では多産であり、しかも小麥や大豆の一俵十圓もすることからくらべれば、薩摩芋はわづかに七十錢であつた。雁金の躍り上つた熱情は想像するにかたくはない。彼はただちに芋取醬油の株式を決意して、その計畫を押坂の親戚にあたる杉生家に持ち込んだ。杉生家と雁金との關係はこのときからはじまつたのである。

杉生兵衛は資産百萬を越えるといはれる富豪であるだけに、雁金八郎の計畫にはすぐ賛意を表した。彼は雁金よりもさきから薩摩芋から醬油をとつてみたいとかねがね思つてゐたことであつたので、「これは神の引き合せだ。」とそのとき云つて、お負けに株の方は萬事自分が引き受けるから特許權だけを一時も早く雁金に買収する工夫をしてきてくれるやうと頼んだ。特許の方のことは杉生家へ行くまへに、雁金がも早や方法をめぐらせて來たのであつたから、そのときすぐ兵衛に向つて、自分は芋取醬油の發明者と昵懇にしてゐるある銀行の支配人の弟といふ人を知つてゐるが、これは自分の小學校の校長であるから、もうその人に相談して來てゐるので、紹介狀をいつなりとも貰ひえられる段取りまで出來てゐるといふことを話すと、杉生は「それはそれは。」と云つて、「私の伴も遊んでゐるから丁度良い。一緒にあなたとやりませうから、あなたも一つ出かけていつて向うの様子を調査して來てもらひたい。」と云ふことになり、雁金は杉生の子の薫と遠い山陰地方まで出かけていくことになつた。

二人はそこで時をうつさず山陰の湖のほとりにある風雅な町へ行くと、早速銀行の支配人に

逢ひ、その紹介でいよいよ發明家の山崎俊介に逢つた。山崎俊介は容貌魁偉な人物で、發明家には似ず辯舌に爽かなところへもつて來て、遠來の客といふので、その土地一流の旗亭へ二人を案内した。率直無類の雁金と世間を知らぬ良家の長男とは、このへだてのない鄭重な饗應のために、難なく餘裕ある思慮分別をかき消してしまつたのである。殊に二人は事を一刻も早く決したくてならなかつた。この感情は遠方から來た事業家にとつては、何事よりも禁物の疲勞から襲つてくるところの惡癖であるにも拘らず、二人は根柢より先づその疲勞に足をさらはれてしまつてゐる自分の身の上には、容易に氣附くことが出來なかつた。なほ且つそのうへ、老獪な山崎俊介は、特許權の賣りつけに對してはすぐ贊意を表さず、二人の若者の心に先づ自身への信賴を植ゑつけんがため、自分の特許の缺點に念を重ねて説明し始めた。さうして後、徐に發明家がいか馬鹿な目に逢はされてゐる正直者であるかといふ事を長長と語つて云つたのである。

「私の醬油は最初の發明でありまして、權利金三萬圓で今の會社に譲り渡したのでありますが、實に商人といふものは脱け目がございませぬね。上手いもんです。新歸朝者のフランス農學博士で豐永鐵之助といふ人を顧問といふことにいたしましたして、例の貴族院議員の互選運動といふやつにまんまと成功いたしますと、否應なしにその農學博士に一肌ぬがせまして、日本國中を各府縣別にして特許實施權といふやつを新しく付與させてしまひましたが、その収入があなた、

それだけで百萬圓に近くなつてゐるのですからね。實際に私が譲つた権利のおよそ三十倍になつたわけでございますよ。」

上には上があるといふ言葉は全くこの場合には興味が多いと思ふ。いつたいにからくりと云はれる人智の窮極を目ざして廻轉していく陷穽は、裏へ裏へと深刻に廻轉して行く度びに、つひにはもとの表面へいつの間にか舞ひ戻つてゐるといふ具合のものほどに深い自然さを感じるが、このときにも、山崎俊介の計畫は、はなはだ自然に巧妙に期せずして行はれていつたとも思はるべきところもあるにはある。しかし、彼の計畫の中には、第一の彼の發明よりも、第二の彼の發明の新たな權利を二人に賣りつけんとする欲望が、最後に隠されてゐたのであつた。彼は第一の發明の芋取醬油のことについては、あくまでも二人に斷念させんがために云つた。「芋取醬油といふものは、實は芋ばかりでは出来ません。あれは大半は芋ですけれども、やはり普通の醬油のやうに大豆や小麥も少しは入れて使ふのでして、良質の醬油を造らうと思へば、どうしたつて豆が必要でありますから、廣告のやうには在來の半値で出来るといふやうなことは出来ませんね。芋取醬油はただ權利を賣るだけに都合が良いので、いざ製造となるとあまり感服出来ないものでしたから、それで私は僅に三萬圓で賣却いたしてしまひましたが、その代りに今度は別に豆だけで本當の力ある醬油の發明をいたしたいと思ひ立ちまして、目下製造中ですけれども、お蔭でたうとう成功しました。これは値段が同じ豆でも、ずつと安くて出来る

ものです。」

それでは芋では駄目かとがっかりしてゐる二人にとつては、この第二の發明は初耳でもあり、當然なことにも思はれたうへに、何となく折角來た遠路の土産にもなりさうに感じられたと見えて、雁金と薫とは再びこの話に氣持ちが引き摺り込まれていつたのである。發明家の山崎俊介のいふところでは、その第二の新しい醬油といふのは、原料が隱元豆からとれるといふのであつた。隱元豆は當時大豆の半額であるといふことについては、豆類を専門とする押坂商事會社の支配人である雁金には、知りすぎるほど知つてゐたところであつたから、山崎俊介の説明はこのとき雁金には直ちに了解することが出來たのである。殊に山崎の説明した隱元の特殊な成分をなすところの、小麥と大豆を混合したのと等しい蛋白質と澱粉とを含有してゐることや、醬油原料として不必要である脂肪を含まない隱元の特質に關しても、彼はよく前から知つてゐた。しかし、彼に降りかかつてゐるこの危機を一層深く失敗に導いた根元が、彼が隱元に對する知識をあまりに精しく知りすぎてゐたといふことにあつたことは云ふまでもないが、なほ一層悪いことには、彼はそのとき豆類のこととは反對に、これはまたあまりに特許法といふものを知らなかつたことにあつた。雁金は勿論のこと、やうやく中學を出た限りの知識よりない薫も、このとき二人は特許權といふものが製造方法にはなく、製造原料にのみ許され得ることだばかり思つてゐたのである。つまり二人は、無謀なことにも、全く特許なるものが原料には絶對

に許されないといふことさへも知らなかつたのである。そのため第一の山崎の發明にかかる芋取醬油も、芋を原料とすることにのみ特許を與へられてゐるものと思ひ込んでゐたのであつたから、第二に山崎から與へられた好餌にも、何らの疑ひも感ずることなく、ただ一刻も猶豫をしておは他から原料特許の寶物を奪はれる氣づかひが一心に早まり、それに飛びついて直ちにその場で、雁金の居住縣下の實施權一萬圓の約定をすませ、約束手形で取引を終了すると、二人は濡れ手で粟の夢を見ながら揚揚として歸國して來たのであつた。

二人は歸つて始終のことを杉生兵衛に話した。杉生は二人の話をきくと喜んですぐ近在のある小驛の附近一帯の土地數萬坪を買收した。さうして資本金五十萬圓の特許醬油株式會社の創立にとりかかることになつた。雁金は押坂商事の支配人を辭職して、新たに設立された特許醬油會社の専務になつた。ところが、權利と工場豫定地の買收も無事にすまし、先づ成功の第一歩に踏み入れたときになつて、突然、株式のプレミアム附募集につきものの特許醬油の専門家の證明が必要になつて來た。そこで、杉生兵衛の友人にあたる銀行頭取の息子に、高等工業の出身者で、家業に専心してゐる優秀な醸造家の塚越逸作といふ眞面目な青年のゐたのを幸ひ、それに交渉したところが、逸作からもまた意外な應援を受けて、株の半額を自分みづから引受けても良いとさへ云ひ出すやうになつて來た。しかし、ともかく何よりも實地調査をしなければならぬといふので、また雁金は逸作と二人で山陰まで出かけていくことになつた。

山陰へ着くと山崎俊介は、も早や杉生兵衛から手形を受けとつてしまつてあつた後だから、虚偽の暴露される損害は自身にはなく、二人の方にかかつてゐるときとて彼の響應は前にも増して鄭重を盡してゐた。さて、いよいよ祕法の傳授となつて、二人は彼の研究所へ這入つた。その結果は、なるほど山崎俊介の説明したところは正しく、一點の偽りはなかつた。しかし、二人が宿へ歸らうとして研究所を出て來ると、塚越は聲を落して雁金に云つた。

「あれは君、結局は駄目です。第一あの男の仕事を見てゐると、隠元を水に浸してから臼にかけて、それから皮をむいて、また蒸して麴にするのですが、机の上の仕事ならあのまま結構通りますけれども、とても何千石何萬石といふ莫大な仕事としちや、出來るもんぢやありませんからね。それにあの醤油は賣物になりませんよ。」

「どうしてです。」

雁金はまだこのとき、少しも成功を疑つてゐなかつたときとて、この思ひがけない塚越の聲を聞くと驚かざるを得なかつた。

「あの醤油は醤油らしい香りがありませんし、それに全然透明なところがない。」

「しかし、山崎先生は在來の日本の醤油は香りがあるので外國に賣れないのだが、あの醤油にはその缺點もないし、比重も二十七度もあつて本物の醤油をはるかに越してゐると仰言つてゐましたがね。」と雁金はまだ容易に裏切られた成功の不服から逃れることが出來なかつた。